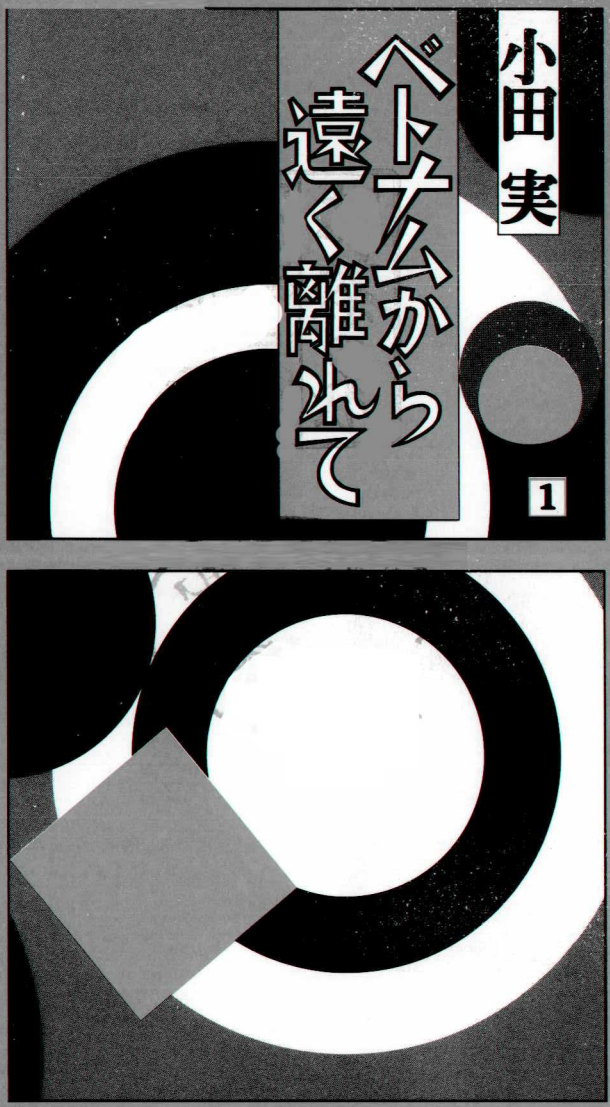
小田実

ベトナムから遠く離れて

1



講談社

ベトナムから遠く離れて　1

一九九一年七月二〇日　第一刷発行

著者――小田　実

© Makoto Oda 1991, Printed in Japan

発行者――野間佐和子

発行所――株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二―〇一

電話　出版部（〇三）五三九五―三五〇四
　　販売部（〇三）五三九五―三六二二
　　製作部（〇三）五三九五―三六一五

印刷所――信毎書籍印刷株式会社　製本所――株式会社黒岩大光堂

定価――四九〇〇円（本体四七五七円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

目次

第一章……五
第二章……五四
第三章……一一四
第四章……一七一
第五章……二三〇
第六章……三〇六
第七章……三七〇
第八章……四六三
第九章……五二三
第十章……六一三
第十一章……七二〇

装丁　田村義也

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

ベトナムから遠く離れて　1

第一章

一

そのおかまと仲間から呼ばれる少年の家は街を見下す高台――いや、それはもう街の背後にかなり激しい傾斜でそそり立つ山の一部と言うべきものだろうか、国土地理院発行の縮尺五万分の一の地図で少年が測定したところでは確実に海抜八十メートルほどにはなっている地点にあって、そこから見下すと港都の中心部と港都がご自慢にしている、その生命とも心臓とも言うべき港の全景がくまなく見えた。ことにおかまの部屋は、このあたりを題材にしたテレビ・ドラマが話題になって以来激しい息づかいとともにあえぎあえぎ上って来るもの好きな観光客たちによって「異人館」というぐあいにあこがれの眼とともに語られる古風な木造三階建ての洋館の三階にあって、そこは傾斜した天井をもつ屋根裏部屋めいた六畳ほどの大きさの部屋だが南方と東方にむかって大きく開いた窓をもっていて、眺望は南方の窓のかなり下のところに見える「眺望絶佳・百万ドルの夜景」を誇る（そんなぐあいに港都の宣伝雑誌やなけなしの異国趣味を求めて遠隔の地からもわざわざ旅してやって来て街をもの欲しげにさまよい歩く若い女性むけの絵入り雑誌にはいつもその店の名前は出ていた）フランス料理店「マルセーユ」よりもはるかにいいとおかまは自分で思っていた。もちろん、それは少年の思い込みだけのことではなくて、彼の部屋は海抜の高度もかなり「マルセーユ」より高い上に、「マルセーユ」のようにすぐまえにそびえ立つそのあたりに多く住むインド人経営のマンションのベランダの存在をことさらに無視するようにして街景やらそのむこうの港の風景やらを見下すというのではなかった。おかまの家は街の中心の国鉄と私鉄とが集中する大きな駅（のまわりはデパートやら商店やらレストランやらバーやらキャバレエやらがむらがって形成する繁華街になっていた）からあたかも一本道をたどるようにしてほとんどまっすぐに上って来たどんづまりの、そこからはもう本格的に山地が始まるという街のおしまいでもあれば山地のおしまいでもある地勢に位置していたから、昔からの彼の家類似の「異人館」であろうとこのごろできの背丈の高いマンションであろうと、あるいはそのあいだにはさまれた場ちがいに貧弱な庶民のくすんだ住宅であろうとすべては部屋から見下すおかまの眼下に平べったく這いつくばっているように見えた。

おかまは窓のすぐそばにベッドをもって来ていて、そこ

に半ば身を起こすようにして横たわっていると、そのままの姿勢でそれら屋並みのつらなりが、まずつい下のおかまの母親に言わせると貧乏な西洋人と日本人のもの好きが住む木造のアパートの褐色の瓦ぶきの屋根から始まって順次下にまるで段々畑のようにしてひろがって行くのが見えるのだが、そのはてに駅近くの繁華街の大小さまざまのビルディングが立っていた。ビルディングのなかで眼立つのはこの街随一の高さを誇る貿易センター・ビルだったが、まるで長方形の箱をタテにおいたような無趣味なビルディングの頂きもおかまの視線よりも少しばかり下方のところに見えて、おかまはそれを見るたびにいつもざまあみやがれと思った。そのビルディングの最上階にもレストランがあって、そこももちろん高さと眺望を売り物にしたレストランだったが、おかまは夜、そこに灯がついているのを見ると、レストランのなかでもったいぶった顔で食べている、それぞれに自分を裕福でもあれば社会の高みのところに立っていると考えている男女の群れを見下している気になった。

そのビルディングのさきが海だった。いや、そこはコンテナ船をむかえ入れるためにこの都市が十年ほどまえにつくり出した埋め立て地の新しい港で、朱色の大きなアーチ型の橋を渡って行くと到達できるその埋め立て地には巨大なクレーンが右から左へ十一基つらなっているのが見えた。たいていの場合、船体を半ば白くぬったコンテナ船が二、三隻、そのクレーンのつらなりのまえにとまっていて、だいたいが一日二日で何万トンというトン数のそれらのコンテナ船は交代する。埋め立て地の右手はそのままずっともとからの港のひろがりにつづいていて、間抜けでぶざまなかっこうをして立つ「ポート・タワー」と称する展望塔の鉄塔のあたりまで何本か突堤が鈍く陽光に光る海に突き出ていた。突堤の姿は前面のビルディングやら倉庫やらの建築物にさえぎられて見えなかったが、そこにとまっている船のマストや煙突は建物のつらなりの間隙を縫うようにして突出して見えた。「ポート・タワー」のさらに右手は造船所で、船台が大きく右手から左手に横に突き出ている上に埋め立て地のクレーンよりもさらに大きなクレーンが蟹のハサミのように左右に尖端をひろげるようにして何基かつづき、じっと見ていると、ときどき蟹のハサミはゆっくりと動く。

その窓は真南をむいている窓で晴れていると太陽の光はいっぱいに入って来て夏のあいだはぶあついカーテンを下ろさないとやって行けないほどだったから、ベッドの上に横たわったおかまがそんなふうにして下の街と港の風景に見入るのは冬のあたたかい日の朝がた十時ごろから午後二時、三時にかけての時刻で、ときにはただそれだけのたのしみのためにおかまは学校へ行くと言って朝がたいったん

外へ出ながら、十時すぎにそこらで時間をすごして帰って来てから塀をよじ登って二階のあらかじめ開けておいた窓から入って三階の彼の部屋に至るというルートでひそかに部屋にたどり着くと、そのまま午前から午後をそこで本を読んだりステレオのロック音楽をヘッド・ホーンで聞いたりしながら陽光をいっぱいに浴びて時間を過ごした。すっきりと晴れていると、ときにはそこから海の彼方に横たわる遠くの島の姿も、あるいは、この港都と西方の港都よりひとまわり大きい都市とそのさきずっと長く伸びる半島によって取り囲まれた湾のたたずまいも大きく見えて来て、彼は自分が宙空にひとり放り出されているような感じをもった。いや、彼はそんな感じをもちながら窓の古風なスチールの枠によって固定された空間のなかにいるのだから、その感覚はどこか高所に吊り出された鳥籠のなかにいるという感覚だったと言ったほうがさらに正確だった。実際、半ば起こしたからだをベッドに沈めて視線を窓の上いっぱいにひろがる蒼空にむけると、自分のからだがそのまま宙空にむかってせり出されて、そこで宙吊りになっている気になった。トンビが大きく翼をひろげて何羽も悠々と彼の頭上を舞っていて、ときにはおどろくほど窓の間近までやって来ることがあって、おかまは彼らが窓のなか——彼の鳥籠のなかにまで入って来るのを期待して窓を開け放したまま何時間か過ごしたりする。残念ながら、まだそういう幸運が彼の鳥籠を訪れたことはなかったが、トンビをじっと見ているうちに、彼は自分がトンビになって空を舞っているような感覚をもった。

トンビを見るのに飽きると、あるいは、どこかに何か獲物が出現したのだろう彼らがあわただしく姿を消すと、おかまは部屋の中央の、下の街頭に棄ててあったのを拾って来たスプリングが半ば露出したソファに腰を下ろして、東方の窓の外の風景に眼をやった。そのときにはたいてい直下の街の繁華街のカメラ店でバーゲン・セールをやっていたときに買って来た倍率七・五の双眼鏡を使って見るのだが、眺望が東方にむかっても開けているのは彼の家が高台の突き出したところにあってすぐ下が市の水道の貯水池になっていたからだ。東方の窓の下すぐに見るからに冷たい水をたたえた大きなプールまがいの貯水池を見るためには身を起こして窓のそばにまで近づいて行く必要があったが、そこからさらに「下界」に降りたあたりからまっすぐに東方へ伸びて行く大通りはソファに坐ったままで十分に見えた。その大通りを下からたどって視線を上げて行くと左方から伸びて来るいくぶん赤味がかった薄紫色の真冬の山脈の稜線に突きあたるのだが、その薄紫色と激しい対照をかたちづくっているのが下方に稜線と平行線をたどるようにして左から右へゆるやかな傾斜で下降する白い屋並みのつらなりで、それを見ているとおかまはここが日本であ

ることを忘れる気になった。だいたいがそのあたりはマンションやら団地やらの建物が多いのだろう、屋並みのたいていが白いビルディングでたしかに日本離れしているのだが、「ナポリみたいだ」とおかまがいつか見た絵ハガキの写真を思い出していると、さつきは「ベイルートみたいだよ」ともっと凝った印象を口に出していた。さつきはもとは外交官だった父親に従って世界のあちこちに移り住んで来ていたからその点でもおかまはかないっこなかったが、さらにさつきは「サンフランシスコもこんな感じだ」とか「アルジェリアのアルジェ、あそこもこんなだよ」とかどこまでがほんとうでどこからがはったりであるのか区別のつきがたい口のきき方をつづけた。おかげでそのあと双眼鏡のレンズを東方の風景にむけるたびにまだ見ぬナポリやらベイルートやらサンフランシスコやらアルジェやらの光景が眼のまえに散乱して来る感じをおかまはもつのだが、おかまが双眼鏡のレンズを通してその白い屋並みのつらなりのなかにとりわけ求めるものは二つあって、ひとつは窓の右手に見える遊園地の観覧車の大きな輪だった。私鉄の駅で三つぐらい離れたところにその遊園地はあったから相当な距離のむこうにその輪は見えて来ているはずだったが、かなり巨大なものなのだろう、赤、ミドリ、黄など色とりどりの観覧車をつけた輪がゆっくりとまわって行くのがレンズのなかに見えた。

その輪の廻転を見るのが彼の東方眺望のはじまりなら、フィナーレとなる行事は窓の左のはしのところに見える、港都ではかなり名前の知れたミッション・スクールの女学校の建物の尖塔の上に突っ立つ聖母マリアの像にレンズの焦点をあてることだった。真南、海のほうを見て彼女は立っていたからおかまからは彼女を横手から眺めることになって、いくぶん前かがみになったそのスラリとした姿態は近くで見ればコンクリート造りの殺風景なものだったが、建物全体がレンズの円環のなかにおさまりきるほどの距離をへだてていると、ふしぎに高貴な感じをあたえる立像になっていた。ことにその感じになるのは夕刻、西方からの夕陽の光が横むきにあたって灰白色のコンクリートが真紅とまではとうてい言いがたいにしてもかなりな赤味を帯びてレンズの底に沈んだように見えて来るときで、おかまはそんなときにはおしまいにはぐったりと疲れてベッドの上に横たわるまで何かものに取り憑かれたように双眼鏡をのぞいた。もちろん、その夕刻の西方から夕陽が街並みを照らし出すころには白い屋並みも赤味を帯びてつらなれば、屋並みの処々方々に開いた窓のガラスがキラキラと輝きもして、ときにはおかまは眺めていてため息をつきたくなるほどの興奮を心の底におぼえた。

それから、ゆったりと夜が来た。そのときにはおかまはまたベッドの上に半ば身を立てて南方の夜景に見入るのだ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

が、その夜景の眺めが「百万ドルの夜景」を誇るフランス料理店「マルセーユ」からのものよりもいっそうすぐれたものであるとあらためて彼は認識するのだ。すぐ手前はただの屋根のつらなりでよほどの月の光が無ければどのようにも輝くことのない暗さだが、それはすぐ終って、そこから急に切れ込むようにしていちめんに光の海が左右にひろがる。それはたえず呼吸をしているみたいにたえまなく点滅する光の海だったが、そのさらにむこうに本物の海のたいていは月の光でうっすらと冷たく輝いたひろがりが見えて、ときにはそこをこまかな光のつぶつぶをマストに点々ときらめかせた船が通り過ぎた。

そうした夜景に見入りながらおかまが冬のさなかでもときどき窓を開けたのは、もちろん、部屋の片隅に燃えるガス・ストーブの換気のためでもあったが、もうひとつ、窓を開けるとたちまち下方からウォーンと潮騒のように湧き上って聞こえて来る光の海全体の音を聞くためでもあった。昼でももちろんその音はして来たが、やはり、夜のほうが世界全体がしずかになっているのだろう、いっそうまとまった音として眼下から上って来て、おかまは視覚と聴覚の双方で光の海の眼くるめく全体にむきあっている感じになった。

それに夜は——もちろんもうそれは両親も兄も姉も、あるいはお手伝いのキヨちゃんも決してこの三階の屋根裏にまで上って来ない、あるいは上って来ても鍵を厳重にかけたこの部屋の扉を開けるまでに眠ったふりをよそおってそれまで身に着けたものをすばやく脱いでパジャマに着替えるだけの時間を稼げる時刻のころだったが、おかまが対する窓の外の景色が昼のそれとはまったくちがった暗黒のなかの光の海であるように、電気を消した暗黒のなかのベッドの上に半ばからだを起こして横たわるおかまもまた昼間とはちがったおかまだった。すくなくとも彼はそんな気持で光の海に対していて、彼の名前もそのときには昼間の紀彦という名前とは似ても似つかぬローラという名前でもあれば、身に着けているものも紺のネクタイに紺のブレザーという彼の高校のいかにも港都のお坊ちゃん学校らしいそれなりにしゃれた制服でもなければ本来はベッドに入ってすでに眠っていることになっている彼が身に着けているはずのタオル地のパジャマでもなく、素肌にすべすべとした感触をあたえてそれがそのままからだじゅうを貫通して行くような快感となっている一枚のスリップだった。彼はそのスリップを二枚もっていて、一枚は純白、もう一枚はそれとまったく対照的に漆黒の闇のように真黒いスリップで、二枚ともに下着マニアとも言える母親の豊富なワードローブから盗んでもって来たものだが、おかまはその夜の気分によって純白のものを身に着けたり、黒のスリップにもした。純白のスリップを着ているローラはまだ嫁入り前

の処女のからだをもったローラで、そのローラは光の海を眺めながらその海の底に彼女を待ちかまえているにちがいない、やさしい心とたくましい腕をもった青年の姿を思い描いている、いや、それ以上にそうした青年の胸のところにゆたかな金色の髪の毛を散乱させながらまだ処女のかたさをもった、しかし、それなりにしなやかなからだ全体をわななかせながらすり寄って行く自分自身の姿を光の海のきらめきのまんなかにあざやかに描き出していた。黒いスリップのローラはそういう彼女にくらべるとはるかに年をとっていたが、若いローラに負けずに、いや、ときとしては彼女以上に妖艶に美しい女性で、彼女の細面の顔かたち、アップに結い上げた黒い髪の毛、その下のほっそりとしたうなじは本来のスリップの持ち主であるおかまの母親とよく似ていた。もう五十歳近いというのに決して三十五歳以上には見えない（と母親のとりまきの男性たちのひとりが彼女に耳打ちするように言ったのをおかまは耳にしたことがあった）、それでいてその年齢相応のゆたかな階層の女性特有の自信と貫禄にみちた豊満なからだを、スリップをそのままパーティでのロングドレスのように見せる優雅な身のこなしで動かしながら（おかまはときどき彼女のそんな姿態にお目にかかることがあった。それは自分の母親ながらハッと目をさまさせるような美しさにみちていて、おかまはそんなときまるで美しい年上の女性を一種羨望と妬ましさのこもった眼で見るまだうら若い女性の眼で見ていた）そばに来た彼女と同年輩の中年紳士にほほ笑んでみせる。おかまの母親がことにきれいなのは肩をむき出しに見せるドレスを着たときのその肩の線で、いくぶん怒りぎみの肩がしっとりといちめんに脂ののったような肌のなめらかさと抜けるような白さとの二つの相乗作用で、誰でもそこにちょっと手を触れたくなる――実際、おかまはいつだったか準備万端なっていよいよ外に出て行こうとして軽いミンクのコートを羽織ろうとする寸前に（そのコートはおかまも母親の留守のあいだに着てみたことがあった。頭にはこれも母親のものである同じミンクの帽子をまぶかにかぶるとおかまの長い髪の毛のはしが帽子の外に垂れ下るようにして出て、おかまの顔も母親に似て細面で、首ももと女の子のように細く長かったからそんなかっこうで母親がよくするように小首をちょっとかしげながら母親の部屋の大きな姿見のまえに立っていると、おかまはまったく女だった。いや、彼女こそ女のなかの女だといつのころからかそういう古風なことばを使っていつも母親のことを考えているおかまの気持にそくして言えば、おかまはそこでまったく母親になっていた）おかまは軽くそのすべすべした、人間の肩というよりは何か弾力性をもった物体のように見えた肌に手を触れたことがあった。彼をおどろかせたのはとたんに彼女が肩を痙攣させるようにびくつかせてそ

のままのけぞるようにしてうしろをふり返ったことで、そのときのコメカミのあたりに苦痛にたえかねるように奇妙にシワをよせた、それでいていつも澄まし込んでいる母親からは想像もできないような両唇を無防備に開いてご自慢の白い小さな歯ならびをくっきりと見せた顔は自分に慕い寄って来る男のすべてをむさぼりとろうとする、これまでにおかまが一度も見たことがない女の顔だった。母親の好きなエスティ・ローダーの暗い赤色の口紅が上下に今にもその両端からヨダレでもたれ下って来るような弛緩した感じで開いた上下二つの唇に光っていて、そのいつまでもおかまの網膜の底に残るイメージを追い求めるようにして、おかまは母親の留守ちゅう彼女の寝室に入ると内側から鍵をかけて、口紅やらお白粉やら化粧水やらおかまにはどれがどれだか区別できないままにいくつも並んだ三面鏡のまえに坐って彼女のエスティ・ローダーをつけた。母親のやっているようにあらかたスティックでつけ終ったあとでさらに小さい刷毛でていねいに輪郭を描く。いや、それからさらに舌をちょっと出して舌なめずりをするようにして唇をなめてから、いつもの彼のものとは似ても似つかぬものとなったいくぶん暗い感じのする真紅の両唇をそこになるべく力をこめないようにして開く。そうするとたちまち立ちあらわれて来るのはたしかにそのときの母親の表情で、そのうっとりとこちらを眺めて来る五十歳近い、しかし、三十五歳以上には決して見えない細面の美しい女性にむかって、「おい、美智子」と彼は呼びかけていた。

もちろん、それは心のなかでの呼びかけだったが、それは彼がしょっちゅう家で耳にしている父親の「おい、美智子」ではなかった。父親の声は彼に似ていくぶんかんだかい気味の声だったが、その声はもっと低めの重々しいひびきをもった、それだけ男性的なものに耳に聞こえて来る声で、その声を一度きりだったが、彼はたしかに現実に聞いていた。それはもう三月まえのことになる、おかまが学校から帰って来ていつものように玄関からすぐとっつきのところにある階段を上って三階の屋根裏の自分の部屋に上って行こうとすると、横手の客間の閉じられた扉のむこうで話し声としのび笑いをするのが聞こえて来て、話し声は男の声――低い、しかし、よく透る、一種のひびきをもった声で、しのび笑いはたしかに逆に人一倍高い声の持ち主の母親のものだったが、彼が聞き耳をたてるようにして一瞬立ち止まったのは、やはり、そこに本能の動きのようなものがあったからだろうか、立ち止まったその瞬間に聞こえて来たその声は「おい、美智子」だった。

ローラ――五十歳近い、しかも決して三十五歳以上には見えないからだの美しさとしなやかさをもったローラになったおかまがベッドの上で黒いスリップ一枚になりながらいつも追い求めているのは、その「おい、美智子」の声の

主だった。現実の生活のなかでもおかまはその声の主を追い求めていて、家に来る、あるいは母親の店に来る男の客、知人、友人の姿をあれこれ思い浮かべてみているのだが、これまでのところその探索は成功していなくて、声の主はあくまで声の主だった。それでも「おい、美智子」というあのことば使いと低い落ちついた声の調子から声の主が決して純白のスリップを着た若いローラがその胸に身を投げかける若い世代の紳士ではないことには判断がついていて、彼はどうあっても母親と同年輩の中年かそれともさらにもう少し年上の初老の紳士だった。ベッドの上の黒いスリップを着たおかま――いや、ローラにその紳士は寄って来てときには年相応に落ちついた身のこなしで、ときには純白のスリップのローラの相手よりもさらにたけだけしくも若くもある動作で彼女を抱きすくめるようにして抱いて、それから彼のやさしげな手の動きが首と言わず腕と言わず彼女のなめらかなからだの表面をなめまわすようにして動いて行くのだが、スリップの吊り紐をその手の動きが肩にずらして外そうとするところで、ローラは「ね、お願い、外さないで」と彼の耳もとに口を寄せながら渾身の力で手の動きを止めようとする。そのまま「恥ずかしいの」と彼女は泣き叫ぶようにして嗚咽に似た叫びをあげるのだが、それは、もちろん、その黒いスリップの胸にかくされた乳房を見せるのを恥ずかしがっているのではなかった。いや、それは、やはり、恥ずかしがっていると言うべきことなのかも知れないのだが、彼女が恥ずかしがっているのはそこに乳房があることではなくて、スリップの上からでは彼女が下着メーカーの知人にたのんで特別につくらせた（あれが「おい、美智子」の声の主ではなかったのか！）装着しているのが判らないほど薄く仕上げたブラジャーの右の乳房にはパッドがいっぱいにつまっていて、つまり、そこにはあるべきほんものの乳房はなかったことだった。

二

母親が乳ガンの手術を受けて右の乳房を根もとのところから失なってしまってからもう三年が経っていた。そのときにはおかまはまだ中学生で、母親が乳ガンの手術で入院すると母親自身の口から聞かされたとき、彼はほんとうに母親がそれっきりで死んでしまうのではないかとひどくおびえたのだが、蒼ざめて唇をふるわせている彼にむかって母親はかえって慰め顔で「紀彦ちゃん、わたしのはガンはガンでもお乳のところにできたガンだから大丈夫、死にはしないわ、わるいところだけ取ってしまえばよいのよ。紀彦ちゃん、あなたは何も心配することないのよ」と言った。もっともあれはあれで自分で自分を元気づけていたのかも知れない。母親も慰め顔でそんなふうに言っているう

ちに彼女のきれいに口紅をぬった唇もいつのまにかワナワナとふるえ始めていた。

手術が行なわれたのは、おかまの家からちょうど直下に貯水池をへだてて見下すことになる、新幹線の駅からほど遠くないところにある市立病院で、その陰気でひねこびたように小さな三階建ての建物は決して母親の手術にふさわしい場所のようにおかまには思われなかったが、父親の話ではそこには港都一と言われる乳ガンの手術の名手がいるということだった。四十代半ばの京大出身の医者だったが、「むつかしい手術はな、あんまり年をとった院長クラスの医者がやるよりも中堅どころのそのくらいの年のがアブラののりきったところでいちばんいいんやで」と父親はそのころしきりに母親にも言えば、おかまたち三人のきょうだいにも少しばかり弁解がましく言っていた。その父親のことばにおかまより五歳年上の、一年浪人したあげくにようやくこのあたりの裕福な家庭の子女を専門に収容すると言われる私立大学に入った兄の健彦が「つまり、これで確実にママのボーイ・フレンドの数がひとり増えたわけですな」と応じたのは、そんなふうに冗談口を叩くことで母親の沈んだ気持をひきたてるつもりがたしかにあったにちがいないが、同時に、やはり、あれはあれで健彦は父にいやがらせを言っていたのだろう。母親は父親の三人目の妻で、二十歳ほども年がちがったから、数年ほどまえまでは港都の会社の経営者仲間のあいだできっての「オールド・プレイ・ボーイ」として鳴らした父もこのごろはさすがに老いとおとろえを見せていて、その点で派手なのは、すくなくともそんなふうに見てとれるのは母親のほうだった。もっとも母親に言わせるとわざとそう見せかけているということになるのだろう、彼女のところには中年、老年、いや、ときにはおかまの姉の早苗が結婚したばかりの相手の信二郎と同じ三十歳過ぎの年齢の舶来一流品の展示会のようにして身なりをととのえて来る若紳士はおろか健彦とほとんど変らぬジーパン姿の若者までが、これも健彦が言い出したのかそれとも案外自分で言ったのかも知れない「美智子詣で」にやって来ていて、そういう男たちのことを母は誰かまわず「ボーイ・フレンド」というふうに自分から言っていた。「ママのボーイ・フレンド」の誰それがどうしたとかこうしたとかというぐあいにだ。あるいは、母親ほどには美貌とスタイルに恵まれていないといつもやっかみ半分にグチをこぼしている早苗が「ママ、今日、えらいハンサムな背の高い男の人と『サン・ジェルマン』にいたやないの」と父親のまえで皮肉と羨望をこめて言い出すのをさえぎって「ああ、あの人ね、ママの新しいボーイ・フレンド。生地問屋の息子さん。パパかって知っていはるわね、ほら、あの木山さんの息子さんの……商工会議所のグリルでパパが紹介して下さった……」と母親はにこやかに

微笑をふりまきながら少しもわるびれることなく言ってのける。

もっとも母親には「ボーイ・フレンド」も数多くいたが、女の友達、知人、とりまきも数多くいて、そちらは母親に言わせると「ガール・フレンド」だった。それから、もちろん、母親の経営するブティックに勤める店員も母親はときには気まぐれに「こちら、うちのヤングのガール・フレンド」というふうに客に紹介したりしたが、そこはそういうことについては人一倍ケジメをつける母親のことだ、彼女たちのほうで母親のことば通りに友達づきあいを始めたつもりになって慣れ慣れしくやり出すと、つい二月まえにも追い出された笹木君子のように母親は容赦なくクビにした。「ママはね、あんなに愛想ようしてはるけどほんまはこわい人なんやで」と笹木君子に泣き込まれた早苗はそのころ口癖のように言っていたが、母親の耳に早苗のそうしたことばはいち早く達したのだろう、母親がいつになくきびしい顔で「紀彦ちゃん、ビジネスの道はきびしいんやで」と突然テレビ・ドラマのセリフのようなことを言い出しておかまをおどろかせた。

そのときにはロング・ドレス姿の母親のあらわになった肩におかまが手をかけて彼女がふりむいたときの無防備に開いた両唇は堅く閉じられていて、たとえそこに彼女がもっとも親しくしている「ボーイ・フレンド」のひとりが不用意に唇を近づけて行こうとも冷たい拒否をくらうのが関の山だった。「ビジネスはビジネス。恋とビジネスは別」とその唇なら言ってのけるのにちがいなかった。いや、母親はそのとき、そこでは親子のあいだでさえ別だと言いたかったのかも知れない。「ねえ、あなた、そうでしょう」と母親が父親をふり返ったのは、父親が母親を妻にしたのは母親が父親の会社に入って、父親の秘書をしていたなかでのことだったから、そこで特別のつながりを感じているのかも知れなかった。今はバラバラになってしまった二人はすくなくとも過去には「ビジネス」のパートナアだったのだ。いや、今でも母親の店は父親の経営する小さな貿易会社からごく一部ではあったがヨーロッパ製の生地や製品を輸入していたから、今もって「ビジネス」のパートナアではあった。ただ、過去は知らず、今はあくまで彼女が主導権をにぎるかたちでのパートナアであることは事実で、港都を一望のもとに見下す古風な洋館を手に入れたのは父親の才覚というものだったが、それを今維持しているのは母親だと言えないこともなかった。一家の生活費を見ているのが母親だというほど父親は落ちぶれて来ているのではなかったが、たとえば、見かけは前時代の洋館のなかをきれいに現代風に改築したり、そこに新式の冷房の設備をとりつけたりするのはもっぱら母親の役割で、母親はいつもそういう自分の役割を子供たちにむかって自慢していた。無

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com